



エッケル先生が筑豊に来ていた始めのころの飯塚教会



住友忠隈炭坑 住宅での教会学校 森田氏宅 1957



住友忠隈炭坑 住宅での家庭集会 森田氏宅 1957



飯塚教会 会堂建築の頃



「心の旅」No.1 -5- エッケル先生 1986年8月11日 (月) 第1日

伝道冊子 T.エッケル著

「キリスト者と労働」は
テオドル・エッケル (Theodor Jaekel) 宣教師による伝道冊子。

エッケル宣教師に共鳴した飯塚教会員森田嘉隆さんは翻訳原稿をガリ版で印刷し、配布に協力した。

なぜか私の手元に残っていたものを私が制作した「データベースによる日本キリスト教団九州教区「宣教の歩み」(1941-1990)の第二章「炭坑伝道」に掲載していたので、ここに転載します。

石炭から石油へとエネルギー政策が大転換する渦巻きのなかにあつて、考えられた伝道理論を今、検証することができる。

日本キリスト教団九州教区「宣教の歩み」(1941-1990)の第二章「炭坑伝道」は下記よりどうぞ

<http://www.wesleyan.ac.jp/.../c.../kyouku-seminar/kyouku.b/2.htm>

キリスト者と労働 Theodor Jaekel (テオドル・エッケル)

目次

休息 ルカによる福音書10:1-42

働きの目的 使徒行伝3:35

私たちの日々 コロサイ人への手紙3:23

私たちの同僚 創世記4:9

困難な仕事 ビリピ人への手紙4:4)

自由と責任 ガラヤ人への手紙5:13)

求職 (マタイによる福音書6:33)

失業 (創世記2:15、詩編128:2)

失業者とキリスト者 (ビリピ人への手紙3:13.14)

ストライキ (箴言24:5)

休息

「主は答えて言われた。「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである。」(ルカ10:41-49)

日曜日は、キリスト教の安息日である。神は私たちを休ませるためにお召しになるのである。ドイツの有名な社会学者 ハイデはこう書いている。「神の命令と人間の本性とが仕事を要求する。と同時に仕事を偶像化することを禁じている。そして仕事には余暇が必要である。それは仕事のために私たちの精力を回復させるばかりでなく、私たちを新しい人間として再生させるからである。余暇は私たちが特殊な専門の仕事に従事する時に、失い易い私たちの全体性を回復し、他の人々との稔り多き交わりの中に生きる能力を回復させる。・・・仕事それ自身が最後の価値をもつのではない。仕事は人間としての私たちに奉仕すべきであつて、人間が仕事に奴隷となるべきでない。

人間の尊厳は人間が仕事をするることにあるのではなく、人間が神の子であり、神と(霊的な)交わりをもち、他の人々と正しい交わりの関係にあることにある。

たとえ仕事がいよいよ意図をもってなされたとしても、仕事はマルタを、「よい方」即ち神との交わりの内にある生活を確保しはしない。神の国はあらゆる人間の活動とは別にやってくる。人間はそれを賜物として受けるだけである。

その賜物は他ならぬイエスのうちにあるのである。心静かな期待をもって新しい生命が私たちにあふれるのを待とうではないか。キリスト教の安息日の意味は、ただ「仕事を休む」ことではなく、「神のために休む」のである。私たちは日々の金儲けの仕事をしむかえようではないか。そしてまた他の人をも忙しく働かせることを慎もうではないか。買い物にも行くまい。あさはかな娛樂にもふけるまい。神を拜し、同信の兄弟との交わりをもとう。私たちの魂に新しい力を与える賜物

麻生の柴田久子さん宅で



同上



飯塚教会献堂 1956



飯塚教会献堂式 1956 エッケル氏前列右から6人目

働きの目的

「あなたがた自身が知っているとおりに、わたしのこの両手は、自分の生活のためにも、また一緒にいた人たちのためにも、働いてきたのだ。わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱い者を助けなければならぬこと、また「受けるよりは与える方が幸いである。」と言われた主イエスの言葉を記憶しているべきことを、万事について教え示したのである。」(使徒20:34,35)

すべての人々同様に、キリスト者も生きるために働く。しかしそればかりでなく、キリスト者は人を助けるための資金を得るためにも働く。キリスト者の働きには、キリストの働きが反映している。キリストは自分のためには何もしないで、すべての人のためになした。その死ですら、単なる生命の自然な終焉ではなくて、やはり人のための働きであった。もし私たちが人に対し愛の心から働くならば、そのような働きはキリストの犠牲的爱を反映する事になる。

信仰をもたない人はただ、生きたい、獲得したい、所有したい、という願望だけしかもっていない。利益を得られさえすれば、時に正直をささ犠牲にする。しかしキリストの体の一員となった人は弱い人々のためにその労力を捧げ又その働きの所得をも提供する。彼の心は「受ける事」を考えることから、「与えること」を考えることになってしまったからである。

その「与えること」とは、私たちが受けている人の人格にはなんら「関心」をもつことなしに、ただ物質的な「ほどこし」をすることではない。キリスト者がする「助け」は宗教的善行ではなくて、「交わり」をつくりだすための手段なのである。キリスト者の働きの目的は「より多くを得る」ためではなくて、キリストの体の成長にあるのである。働きの中心がもはや自分自身ではなく神と他の人々にあることが、働きに対するキリスト者の態度の特徴である。

私たちの日々

「何をするにも、人に対してではなく、主に對してするように、心から働きなさい」
(コロサイ3:23)

神は建設者であり、そして神は今も働いておられる。

神は自分の形に人を創造された。人間はすべて被造物を神が支配されるように支配しなければならぬ。そして世界を支配するためには人間は働かなければならぬ。それだから人間は神の同労者なのであり、そして労働は高貴なことだからである。人は労働を愛すべきであって避けるべきではない。神が私たちが労働に召したもうからである。そしてそのような神の召命は私たちの日々の働きにどんな影響があるのだろうか。信者のなすすべての人は神の召しに対する応答である。だから、キリスト者の名誉心は世俗の標準に従って社会で高い地位につくことではない。神の召しに対する忠誠である。もし彼が神の召しに対して忠実であるなら、彼の職業がなんであろうと、すでに彼は高い地位にあるのである。なぜなら彼は神の仕事をしているからである。

キリスト者は神の同労者であるから、資材を無駄にしない。彼自身の財産であろうと、会社のものであろうと、学校のものであろうと、政府のものであろうと、そして彼の管理するものであろうと、金銭であらうと決して無駄にしない。すべてそれらの資材は神の財産であり、彼が注意深く責任をもって使用するように委されているのである。

キリスト者は正直で質素できちょうめんである。不精でも怠惰でもない。時間は神の財産だからである。時間は私たちが正しくつかうために与えられたもので、誤用したり無駄につかったりすべきではない。

キリスト者は仕事が適切になされるように気をつける。他人から監督されていない時でも上べだけでない完全な仕事をする。なぜなら彼は神に監督されているからである。キリスト者の仕事はその信仰のあらわれである。うわべだけの仕事は、うわべだけの信仰を示している。そして私たちは信仰が深くなればなるほど、よりよい仕事をしとげるであろう。

私たちの同僚

「わたしが、弟の番人でしょうか」(創世記4:9)

私たちの生活の大部分は私たちの仕事のなかに注ぎこまれている。それが学校であり、会社であり、商店であり、工場であらうとも、その職場では例外なく同僚と一緒にいる。私たちはそれらの同僚が好きであることもあるが、嫌いであることもある。そして同僚は私たちが助けてくれることもあるが、競争する事もある。私たちはいつも同僚とは自分にとってなんであるかと考える。しかし私たちがまた同僚に影響を与えているのである。私たちの生活は彼らの生活の一部になっている。だから私たちが仕事をする職場には、それと同等の同僚をもつべきである。希望は

ら私たちは既に神の国に召され、キリストとの交わりの中にいられ、私たちの心は帰られた。恐れと我が意とはとりさられ、今や私たちの心は神に頼っている。そして私たちは平安と確信とを神より日々与えられている。生活の目的の中心はかわってしまったのだ。それはもはや「私の生活」「私のもの」ではなく、「キリストの生活」であり、「彼の物」なのである。私たちは主の僕になったのだ。主が他人を愛してそのために死なれたように、私たちの心の中心に入ってきたのは他の人々なのである。私たちの生活の目的は今や、神の心にかなうように歩むことである。

それでは私たちは職場で一緒になる人々に対してどうすればよいのか。どのようにして同僚に私たちの信仰生活を示したらよいのか。同僚たちの生活はこの私との接触によってよりすくなくなるであろうか。わたしたちの反対者たちは、私がキリスト者である事をどのようにしめしめと感ずるであろうか。どうしたら先生や他の学生たちが、私が試験の日にも神の加護のもとにあることをさとるであろうか。

これは私たちにとって重すぎる要求だろうか。私たち自身をよく考えてみると確かにそうである。しかしキリストは私たちを彼との交わりにお召しになった。キリストは私たちの職場において私たちと一緒に働いておられる。もし私たちがキリストの招きに従うなら、私は私たちの同僚のためにキリストのような生き方をすることが出来るはずだ。

困難な仕事

「あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい」(ピリピ人4:4)

パウロは獄中の困難な状況のなかから、この言葉を書いた。ときどき私たちはひどく難儀な仕事にゆきあたる。仕事に喜びも満足もなく、ただ困難と重荷ばかりであることがある。そういう場合、普通の人は怒るかまたは「仕方がない」と言って諦める。そのような状況にあって、私たちはキリスト者としてどうすべきであるか。

その職場で毎日困難な状況に直面している一人の人を私は知っている。

彼は職場が神の意志にしたがってすべてを行うようにと戦っている。しかし彼は殆ど成功しない。彼の上役はキリスト教信仰の価値を認めない。彼は私に語った。毎朝、彼を待ちかまえているはてしない困難のことを思うと、彼の心はみじめであった。実際、彼はその職場へ行きたくなかった。しかし彼は生活費を稼ぐ外の手段をもたなかった。ところがある朝、一つの出来事が起こった。

職場への途上「キリストが助けて彼の職場を変えて下さるよう」と祈っている時に、彼はキリストがすでに彼に先立って困難な仕事の場へ行きつつあることをさとした。

キリストは彼とおなじ不満な状態を経験しつつある。しかしキリストは忍耐強くこの十字架をせおって、彼――私の友だちではなく――の約束の時に、この状態を一新されるであろう。そこで、この私の友だちはもしキリストがそうされるのであれば、私もまたおなじようにしようと思った。

彼はキリストの手につかまった。これまで恐れ、嫌ってきた困難の中によるこんで進んで言った。彼はあきらめて仕事にむかっただけではなく、また悲壮な絶望的な気持ちからではなく、喜びと確信をもって前のように奮闘を続けるよう決心したのである。なぜなら、もはや彼一人ではないからである。

私たちは職場において困難をキリストがすでに背負われた十字架としてひき受けていこうではないか。そしてこれが私たちの働きの中かでキリストに出会う道なのである。もしキリストに出会ったなら、困難な仕事ももはや重荷ではなくなる。私たちはその困難のさなかにおいて喜ぶことができる。

なぜなら、私たちはキリストとの交わりのなかに入ったからである。

自由と責任

「あなたがたが召されたのは、実に、自由を得るためである。ただ、その自由を、肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。」(ガラヤ5:13)

キリスト者は正義とまことの神の僕である。

もし、その職場で不正に出会うなら、勇敢に自身の真実を示さねばならぬ。沈黙している事は不正を支持することになる。キリスト者は忍耐することを知っているが、忍耐することは黙っていることではない。たしかにキリスト者は批判すべきことは批判すべきである。しかし、キリスト者の批判は非キリスト者のヒューマニストの批判とはおのずから異なっている。

21才の若いキリスト者(会社員)の例をあげよう。

地方の有力な実業家が所有する彼の小さな会社が破産した。その所有者は出資金をもって退き、関係していた他の会社に移って、なんら損害をこうむらなかつたが、従業員だけは月給がもらえないので苦しんだ。

彼の苦痛は、その妻に對して社会的にも、行、業、従業員に對、可憐なるに於

神の聖霊はこの青年に働いて社長のところへ行って、従業員が困っているのに社長だけか新しい地位について

安楽にしているのは非常に不当であることを話すように告げた。青年は話したいと思ったけれど、やはり上役がおそろしかった。彼はチレンマに陥ってどうしてよいかわからなかった。そこで彼は祈った。この祈りの中で聖霊は二つのことを教えた。第一に、その批判の動機が単に闘争のためや、彼自身のため、また同僚のためであるのではなく、彼の上役の心も正しくあるためにも責任を感じべきであること、第二に、聖霊は彼の社長に対するつらい気持ちを楽しんだ。そこで彼は自由な気持ちで愛の心に満ちて、上役にむかって話す事ができた。そのような自由と勇気とは聖霊の導きに従順であるところから生まれてくる。

求 職

「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられる。」(マタイ6:33)

この数ヶ月は多くの学校卒業生にとっては就職運動の月である。就職は年毎にむづかしくなっていく。このような状況に対して教会にはなにか有益な助言をすれことができるだろうか。(たしかにできる)二人の友だちのことを話してその助言をお伝えしよう。

二人とも去年、大学を卒業した。一人は興奮しやすく神経質であった。

そしてある社長に紹介されるちょっとした機会があった時、ちょうどしなければならなかった仕事から逃げようとした。彼は折角の機会を失うことをおそれて信頼できない人間になった。彼は今日までまだまだ職を得ていない。もう一人も去年の春には就職できなかった。けれど彼は冷静さを失わず、まず神の国を求め、そうすれば、他のものは彼に加えられることを信じていた。彼は神の国がキリストにおいてすでに来ていることを知っていた。もう、そこに来ているのだ。だから怖れも心配もいらない。彼は信頼すべき堅実な人間として推薦され、秋になってまったく思いがけなく仕事が見つかり、高等学校の先生になった。

絶望的な状況のなかでも、キリスト者は勇気と信仰をもっている。キリストがそこにいまして、一人一人の信者のために計画をもっていて下さるからである。この計画は人間にとっては失望であっても、良い物だからである。だから、期待をもって前進しようではないか。おそれと心配は信仰をもたぬ者がとる当然の態度である。しかしキリスト者である私たちは主が私たちを愛し、そして現に今、生きておいでになり、神の国は近づいていることを知っている。

失 業

「主なる神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせた。」(創世記2:15)

「あなたは自分の手の勤労の実を食べ、幸福で、かつ安らかであろう」
(詩編128:2)

深刻化してゆく失業問題にうちめめされている北九州の炭鉱地帯の中心で私はこの一文を書いている。傾いた社宅の家並みを通って行くと、「いつ、俺は首を切られるだろう」というささやきか聞かれる。教会は失業問題をどう考えているか。神は世界を造って、その中で人間はただ働くことによって生きてゆくようにされた。人間は神の創造されたものを勤労によって守っている勤労は安らかな心と幸福な生活によって祝福される。失業状態がながびくことは神の意志に反している。私たちは経済組織をすべての人とが働けるようなものにしなければならぬ。わが国の経済問題を解決するためには合理化が必要であるしかし、その合理化は失業者を生み出す。そのためにはまた失業問題をも克服しなければならぬ。失業は売春と同様の社会悪である。人間は仕事がないと惰性のなかで墮落してゆく。だから失業保健は一時的に失業者の生活の助けとなるが、失業問題を根本的に解決しない。

イエスは助けを必要とするみじめな人にも、ほどこしは与えられなかった。が、それ以上のものを与えられた。

イエスは彼らの問題を根本的に解決し、癒し、社会の有用な一員として復帰するまで癒しを与えられた。イエスは全力を挙げて彼らを助けられた。それゆえに私たちは失業者をただ金銭によるばかりでなく、彼らのため仕事をつくりだして助けなければならぬ。教会や実業界や議会などの有力な地位にあるキリスト者は全力を挙げて援助しなければならぬ。それは神がそれらの人々に委ねられた任務なのだから。考えをつくし、全精力を結集して失業問題の解決に当たらねばならぬ。なぜなら、失業とは神から放れた生活状態である。

キリスト教界の指導者も牧師も平信徒もすべての失業者のために職場をつくりだされるまで休みなく努力するような祈ろうではないか。私たち自身も、この神の意志に反する社会悪をなくすために何かをなすまでは、安心心にのんきにしていることはできない。

「後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の賞与を得ようと努めているのである。」(Ⅲピリピ人3:13-14)

失業者に対するキリスト教の発言は何か。私はちょうどその日に首を切られたばかりの若い鉱員にあった。絶望にうちひしがれて彼は私の前に立った。私が「それで、あなたの生涯の一時期が終わったんだね」と言うと、彼は悲しげにうなずいた。そこで私は「それじゃ、喜びなさい。今までのことは考えないで、もとに戻ることにはできないのだから、それはもうすぎてしまった。もう死んでしまったのだ。前を見なさい。おそれや心配ではなく大きな期待をもって、もっとよいことが待っているよ。キリストはあなたの過去がここで終わるようにされたので、あなたの将来のことも知っていられよう。これから困難があるかも知れない。あなたははげしく戦わねばならないかも知れぬ。しかし、あなたはこの戦いの一歩毎にあなたの生活を建設してゆくであろう。なぜならキリストはこの困難のさなかであなたを待っておられ、その困難のなかからあなたを召される。「私のところへおいで、あなたのためによりよい計画がある」とおっしゃる。喜びをもってキリストに向かって進みなさい。キリストは困難の中であなたに会うことを願っておられる。その時、はじめて青年はキリストがよみがえって生きておられ、キリストと共なる生活が現実の実際のものであることをさとった。彼は失意の態度を捨てて、あちこちと熱心に仕事をさがした。何ヶ月も成功しなかったが、失敗するごとに彼は言った。「キリストと共にしたよい経験であった」と。今、彼は東京で就職している。

信仰をもたない彼の同僚たちはただ他人からの助けをあてにして無為にすごしている。自分で努力しようとしなくて、状況がよくなならないと不平を言う。彼らは以前のことがかり考えて新しいことを考えることができない。彼らは新しい場所で新しい仕事を見つけようとしなくて、だから依然として職がなくおなじ土地にとどまっている。

悪いできごとが信仰者をうちひしく時、彼は二つのことを知っている。第一に、この事は主がお知りにならずに起こったのではないこと。第二に、主はよりよいことを用意しておいて下さること。だから、過去はうちすてて、後をふりかえることなく、うしなつたものを悔やむことなく、よりよいものを期待している。前途の戦いは困難であるかも知れない。しかし戦いのさなかに主は待っておられて召したもう。「私にきなさい。私はあなたを愛してあなたのために、よりよい未来を用意している」と。だから信仰者は彼の主に会うために前進する。

ストライキ

«知恵ある者は強い人よりも強く»(箴言24:5)

労働者にとってストライキをする権利は闘争において経営者を彼らの要求に同意させるために必要な武器である。それは労働者のもつ最後の武器である。この武器がなかったら労働者は経営者に圧迫されるであろうことは疑いもない。労働者がスト権をもつのは当然であり、さもなければ経営者はあらゆる権力をふるって思いのままに自分の意志を命令して従わせることができる。しかし、スト権はもて遊ぶ玩具ではない。それは鋭利な破壊的な武器である。なぜなら、ストは生活の基礎である生産の自然の流れをとめるからである。経営者と労働者のみならず、一般の消費者まで被害をこうむるからである。

ストライキは国全体の経済に影響を及ぼすのである。そればかりではなく、ストは—ちょうどすべての戦争がそうであるように—ときおり私たちを盲目にして、何が正しいかを判断する力を奪う。ストライキ中には、戦争中と同様に憎悪と虚偽が容易に頭をもちあげる。だからこの武器はよほど賢明に使用されねばならぬ。適正なストライキはいかなる性格のものであるべきかということを熟考することは、キリスト者の義務である。ある若いキリスト者労働者のグループが今年の秋、東京における会議で、次の結論に達した。即ち、ストライキは次のような場合に適正である。

1. その目的が正当で、かつ重要であり、
2. 妥協の為のすべての手段が失敗し、
3. その目的がストライキによって達成される確信があり、
4. ストによって得るところと、よい結果とが受ける被害と損失より大であり、
5. ストの実行方が適正で他人の権利を侵害せず
6. 大多数の労働者の投票で決定されたストであり、
7. スト中でさえ、たえず調停和解の手段を見出す努力がなされ、
8. ストがはじめられる前に会社の社会的財政的な条件、および一般社会の状況と要望とが十分に考慮されたものである場合である。もし私たちがストのあることを聞いたなら、それに関わりあるすべての人が知恵をもつように祈るうではないか。なぜなら、ストは戦いであり、生活の基礎は戦いではなく、協力であるからである。

(完)

